

論文要約

論文題目 太平洋を越えて—アメリカ華僑と中国政治(1900年—1949年)—

申請者 宋玉梅

本学位申請論文は、1949年の中華人民共和国成立以降、アメリカ華僑がどのようにそれぞれの居住地を中国大陆、台湾、あるいはアメリカ合衆国のうちから選びとっていったのか、この現象の歴史的な原因解明を目的としている。研究方法としては、20世紀におけるアメリカ華僑と中国政治との関係をトランスナショナルなものであるとの視座を確保した上で、1900年から1949年にかけての、華僑の反清革命、抗日運動や内戦との関係、中米関係・日中関係・国共関係からの影響を考慮しながら、華僑たちの越境行動を考察し、彼らの政治意識形成過程を歴史事例研究として明らかにする。

本論文は、序章、第1章「米洲洪門致公堂と孫文」、第2章「抗日戦争中のアメリカ華僑—楊帝沢を事例として—」、第3章「日中戦争期の華僑と祖国政治—国民参政会参政員司徒美堂を事例として—」、および結語から構成されている。

1912年1月1日、中華民国が成立し、孫文は臨時大統領に就任、1912年2月12日宣統帝は「退位詔書」を発して、250年来中華の地を支配してきた清朝の幕を閉じた。しかし、以後の中国は、南北政府の対立や省の独立運動など国内紛争が続いた。さらに、日本の侵略や、第二次世界大戦の勃発など外部からの衝撃を受け、1949年中華人民共和国政府成立に至るまで、中国国内は到底平和状態と言えない状況にあった。

こうした複雑な社会状況の中、華僑の政治意識の形成過程と越境動機を正確につかむために、本論文には、米洲洪門致公堂、中華民国陸軍少将・米陸軍大佐まで昇進した軍人楊帝沢(1910年—2000年)、および中華民国参政会参政員となった司徒美堂(1868年—1955年)と中国政治との関係を事例として取り上げ、辛亥革命以来積極的に中国革命を支持したとされる「愛国華僑」の一般像を詳細に考察する。具代的に言えば、孫文とアメリカ華僑社会の関係を見直し、戦争などの社会変動から大きな影響を受けた楊帝沢の個人史を検討、さらに国民党支持者から共産党支持へ転換した司徒美堂の政治的プロセスを論証し、華僑はいかなる方法を通して、中国政治に影響したか、を公文書や同時代資料を分析しながら検証する。

以下は本論文各章の内容を概観していこう。

まず概念の整理から始める。序章は、中国語、日本語、英語文献に使われている「華僑」、「華人」、「華民」、「華裔」、「Overseas Chinese」、「Chinese American」、「中国系アメリカ人」などの用語を整理し、その歴史背景及び形成過程を追求した。国際法の視点から、これまで華僑と華人を分別基準とする国籍分別方法の限界を指摘する。他方、日本の中国系アメリカ人研究成果中のトランスナショナル概念の混乱を批判し、移民研究におけるトランスナショナル概念を年代別に改めて整理した。これまでのアメリカ華僑と中国政治関係の研究成果をまとめ、問題点を指摘し、前述した同時代資料、近年に公開された国民党史料など関連史料を用い、事例比較の研究方法によって、アメリカ華僑と中国政治との関係をトランスナショナルな視点から考察する。

本文となる第1章、第2章、第3章に取り上げた事例は各自の先行研究と使われている一次資料それぞれ異なる一方、時代背景を考慮し、深くかつ正確アメリカ華僑実態を解明するよう、序章にまとめて書き込むのではなく、各章に分散する方法を取っている。

第1章では、「国父」と呼ばれる孫文がいかにアメリカ華僑組織洪門致公堂を通して、アメリカで革命募金活動と革命宣伝を行ったかについて取り上げる(1900年-1915年)。孫文は、どのように活動を行っていたのか、及びそのプロセスを文献によって全面的に分析する。これまでの「愛国華僑」を前提とするイデオロギーの下での華僑研究を批判し、歴史学の視点から文献を解読する。孫文と華僑との関係を見直し、アメリカ華僑は孫文を通して中国政治に参加しようとする動きを見出せる。もし孫文がアメリカ華僑コミュニティで革命活動しなかったとしたら、アメリカ華僑の中国政治への直接参加の機会が生まれなかったかもしれない。孫文とアメリカ華僑コミュニティとの関係によって、初めて後者の祖国政治への関心を引き上げ、経済面だけではなく、政治面においてもアメリカ華僑は中国政治に影響を与え始めたのである。なお本章では、従来の「愛国華僑」像を打破し、彼らの祖国との関係を見なおし、華僑たちの視線から見る「近代国家」概念にも言及する。

第2章は、ハワイ生まれのアメリカ華僑二世楊帝沢の事例を取り上げ、アメリカと中国二重国籍を有する楊帝沢は、まさに前述したアメリカから引き上げ帰国した数多くの華僑の代表例である。彼の軍人としての履歴は、中国軍隊への加入から始まって、1943年12月少将の位を辞してアメリカ陸軍に入隊し、それ以降アメリカ陸軍士官として、太平洋戦争、朝鮮戦争、ベトナム

ム戦争に参加し、退職の時、大佐 (Colonel) にまで昇進した。1931 年満州事変以降、アメリカ華僑コミュニティは中国の抗日運動を断固支持する態度をはっきり示し、中華会館をはじめとする各華僑組織は、募金活動を行い、新聞社は中国国内状況を大々的に報道し、中国を支援する世論を引き起こした。アメリカ大学の教育を受けたとしても、適切な職を見つからず、チャイナタウンに戻った中国系アメリカ人の若者の一部は、中国に帰る道を選んだ。楊帝沢はその一人である。1943 年「中国人排斥法」が廃棄され、中国系アメリカ人に掛けられてきた制限が緩和され、彼らの職業選択も広がっていった。

楊帝沢は軍人という特殊な職業を選んでアメリカ軍に貢献している。太平洋戦争勃発後、およそ 4,000 人の中国系アメリカ人が米軍に加入したと推定される。彼ら軍人としての「忠誠心」(loyalty) が求めた。本章では、楊帝沢の事例を通して、抗日戦争、太平洋戦争中の複雑な中米関係、アメリカ国内における中国系アメリカ人の状況の改善など社会変化、政治変化が楊帝沢の政治意識の形成、政治選択にいかなる影響を与えたのかを考察し、「忠誠心」の多面性かつ複雑さを提起し、実証する。

第3章では、ニューヨーク致公堂の司徒美堂が中国参政院参政員に至るプロセスの事例を取り上げ、アメリカ華僑の中国政治への直接的な参加のプロセスを解明する。彼は国民政府によりアメリカ華僑コミュニティから指名された二名の中国参政院参政員の一人である。アメリカ華僑コミュニティといっても、サンフランシスコ華僑コミュニティとニューヨーク華僑コミュニティは似ている点がある一方、異なる点も多いことに注目する。時代の変化を念頭に置きながら、第1章のサンフランシスコの洪門致公堂と比較しながら、ニューヨーク致公堂の特徴を指摘し、これまで利用されていなかった国民党史料を分析し、「愛国華僑」の像を再構築する。司徒美堂の事例的な研究によって、中国国民党と中国共産党との戦いがすでにアメリカ華僑コミュニティにまで及んでいたこと、中国国内政治変動は常にアメリカ華僑に影響を与えたことを実証する。中米の間に空間的な距離があったとしても、政治面に置いて互いに影響しあう特徴や、共産党と国民党の華僑コミュニティへの浸透プロセスも確認できる。

最後に、第1、2、3章の事例を比較しながら、1949年中華人民共和国成立後、アメリカ華僑たちが、なぜ大陸、アメリカ及び台湾を居住地として選んだのかを解釈し、その歴史的原因を提示する。また、1972年の中華人民共和国・アメリカ間の国交正常化以降、サンフランシスコ華僑コミュニティとニューヨーク華僑コミュニティの共産党・国民党に対する異なる態度を指摘

する。さらに、華僑たちの視線からミクロの分析より、「中国を失った」の要因を探ることができよう。